

## 原 著

## 成人期男女の避妊に対する行動とイメージに関する研究

木戸久美子\* 林 隆\* 真田 瑞穂\* 山本 尚美\* 北川真理子\*\* 内山 和美\*\*\*

## 要 約

避妊行動の背景にある避妊に対する意識とイメージを明らかにし、男女で避妊に対する意識やイメージがどのように偏っているかを比較検討することを目的とした。対象は、成人期男女で避妊のイメージ20項目を作成し質問紙法による調査を実施した。対象は県内の成人期男女376名で、156名の男女から回答があった（有効回答152名、回収率41.5%）。

避妊方法は「コンドーム法（男性）」が7割と最も多かった。避妊方法選択の合意については、8割が「納得している」と回答していた。避妊方法や避妊方法選択について男女差はなかった。

「避妊しなかった」と答えた者のうち、8割近くの者は、妊娠を望んでいないにも関わらず、避妊していなかった。成熟期世代の避妊に対する知識が十分に浸透していない可能性が示唆された。

避妊のイメージは5因子構造をなしていた。避妊のイメージ構成要因は、男女及びパートナーの有無では有意な差がないことが明らかになった。

キーワード：避妊、イメージ、意識、成人期

## I. 緒 言

男女共同参画社会実現のためには、女性の性に関する健康と権利が保障されなければならない。本邦における現状は、低用量経口避妊薬の認可をめぐる論争からも女性の性の健康と権利が十分保障されていない土壌が存在している。女性の性と健康の権利保障の第一歩であった低用量経口避妊薬は、様々な問題を抱えながら認可された。認可後、2年以上が経過したが、本邦では低用量経口避妊薬は普及していない。避妊の実施や方法の選択には避妊に対する意識やイメージが関与していると思われる。女性の性の健康と権利を保障するために、低用量経口避妊薬を普及させることは重要課題であり、その普及を阻む要因の分析が必要と考えた。

日本で用いられている避妊法については、林ら<sup>1)</sup>は、選択される避妊法としてはコンドーム法を7割が選択し、避妊実施時、パートナーと積極的に話し合うものは3割に満たなかったという。コンドーム法は近年、女性用が発売されたが、普及しているとはいえ、男性用のコンドーム法が主流であり、男性用コンドーム法は男性の同意がなければ実施できない避妊法ともい

える。生殖年齢における女性の人工妊娠中絶件数が減少しない<sup>2)</sup>背景として、避妊における男女の意識の違いが避妊法決定にも関与しており、避妊法選択権における男女比率が男性優位に傾いていることが原因ではないかと考えた。40歳代～50歳くらいまでの世代においても人工中絶件数は決して少なくないとみることができ、既婚者が多くを占め若年世代よりもむしろ広い範囲で性行動率の高い世代に焦点をあてて避妊における男女の意識を調査するべきではないかと考えた。

本論文では、避妊行動の背景にある避妊に対する意識とイメージを明らかにし、男女で避妊に対する意識やイメージの相違について成人期世代に焦点をあて比較検討することにした。

## II. 研究方法

## (1) 用語定義

ここで用いている性的パートナーとは実際に性交渉をもっている異性を指す。

## (2) 調査方法

成人期男女の避妊に対する意識と行動を調査するため質問紙を用いて調査した。

\*山口県立大学看護学部

\*\*名古屋市立大学看護学部

\*\*\*県立長崎シーボルト大学看護栄養学部

質問紙の内容は、対象の属性に関することとして、性別・年齢・性的パートナー（実際に性交渉をもって異性のこと）の有無、性的パートナー有の場合は、最近経験した性交渉から経過している日数、最近経験した性交渉についての避妊実施の有無、方法、選択した避妊法についての納得の有無、避妊法決定に関する意思表示について選択肢式質問で回答をもとめた。避妊に対するイメージは個人的要因と社会的要因からなる層構造に基づいて枠組みを作成し、内容的なものは国際家族計画連盟（IPPF）Medical and Service Delivery Guidelines for Family planning. 2nd edition（1997）にある患者の権利の項目を参考にし、20項目の避妊のイメージを作成した。避妊のイメージは5段階のリッカートスケールを用いて、「思う」～「思わない」までの記載を求めた（表1）。今回作成した避妊のイメージの信頼度係数 $\alpha=0.83$ であった。

表1 避妊に対するイメージ

Q1	避妊に関する情報を知る機会がない
Q2	正しい情報提供がなされていない
Q3	避妊器具や避妊薬入手の方法が閉鎖的である
Q4	販売する側が避妊器具や避妊薬に対して偏見を持っている
Q5	避妊方法の選択権がない
Q6	避妊や性に関して社会の偏見があると思う
Q7	保健所などの公的機関に相談窓口がほしい
Q8	学校では性教育に避妊の情報を組み入れてほしい
Q9	避妊について教育現場で柔軟な姿勢が欲しい
Q10	家族の誰かと避妊について話すことができる
Q11	避妊に関心がある
Q12	避妊についての正しい知識をもちたい
Q13	避妊法選択する時は体への影響を気にする
Q14	避妊器具や避妊薬は経済的負担が多い
Q15	避妊器具や避妊薬の販売方法は閉鎖的である
Q16	避妊することで安心してパートナーと性行動を共にできる
Q17	避妊法を実行することは自分の性行動に責任をもつことになる
Q18	避妊法を実行することは男女平等の意識をもたせる
Q19	避妊法を実行することは女性（男性）の尊厳を守る
Q20	避妊についての問題や心配事を話せる環境がない

### (3) 研究対象

対象は県内の成人期男女376名で、青年会議所、校長会、病院を通じて会社員、教員、病院職員に手渡し、郵送法により回収した。156名の男女から回答があり、うち記入漏れ、性的パートナー有と回答した者で、現在の年代とは異なる年代においての性交渉の経験に対する回答である場合を除外した。有効回答数は152名（回収率41.5%）だった。

### (4) 分析方法

回収したアンケートは、集計した後、統計処理を行った。統計ソフトはSPSSVer. 11.0を使用した。単純集計後、クロス集計したものについては $\chi^2$ 検定を行った。連続変数間の差の検定にはT検定及び分散分析を

行った。避妊のイメージについては男女の避妊に対するイメージを構成している要因の分析のために探索的因子分析を行った。

### (5) 倫理面の配慮とインフォームドコンセント

倫理面の配慮とインフォームドコンセントとして、プライバシーに関わる質問項目であるため、個人が特定されないよう配慮し、集計・統計処理を行う旨、質問紙とともに調査依頼書に付して同意をもとめた。

## III. 結 果

### (1) 対象者の属性

対象者の属性を表2に示す。性別は、男性69名（45.4%）、女性83名（54.6%）だった。性的パートナーの有無については、「性的パートナー有」134名（88.8%）、「性的パートナー無」18名（11.8%）だった。年齢は、全体平均38.9歳（19-60歳）、男女別では、男性平均41歳（22-60歳）、女性平均37（19-59歳）であった。年代別でみると、20代37人（男性15人、女性22人）、30代52人（男性24人、女性28人）、40代29人（男性7人、女性22人）、50代以上34人（男性23人、女性11人）だった。

表2 対象の属性

性別	男性	69名	45.40%
	女性	83名	54.60%
性的パートナー	あり	134名	88.80%
	なし	18名	11.80%
年齢	男性	38.9歳	19-60歳
	女性	41歳	22-60歳

### (2) 避妊に関して

#### 1) 避妊方法選択について

選択した避妊方法について図1に示す。「性的パートナー有」と回答した134名について、「避妊した」78人（51.3%）、「避妊しなかった」54人（35.5%）、無回答20人（13.2%）だった。「避妊した」と回答した78人の避妊方法は、「コンドーム（男性用）」58人（74.4%）（男性30人、女性28人）と最も多く、次いで、「性交中絶法（膣外射精）」19人（24.4%）（男性8人、女性11人）、「オギノ式」4人（5.1%）（男性2人、女性2人）、「不妊手術」4人（5.1%）（男性1人、女性3人）、「殺精子剤」1人（1.3%）（女性1人）、「その他」1人（1.3%）（性別不明）だった。「コンドーム（女性用）」、「低用量ピル」、「IUD」、「リズム法」はい

なかった。各避妊方法別に男女による回答の偏りはなかった。各避妊方法別の年齢差は、コンドーム法（男性用）と性交中絶法（膈外射精）ではみとめられなかった（コンドーム法  $t=0.4$ ,  $p>0.1$ 、性交中絶法（膈外射精）  $t=1.89$ ,  $p>0.05$ ）。

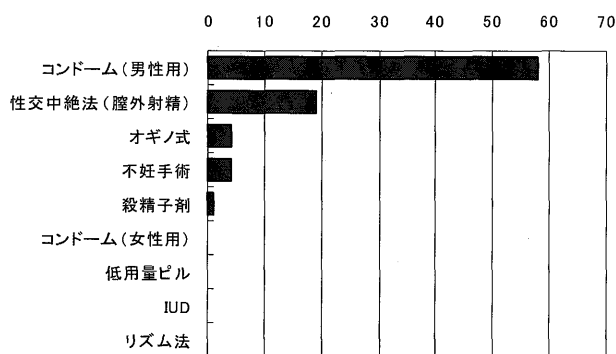


図1 避妊方法

2) 避妊方法選択の合意について

避妊方法選択の合意を図2に示す。「避妊した」と回答した78人のうち、避妊方法について納得しているかと尋ねた結果、「納得している」66人(84.6%)（男性32人、女性34人）、「仕方なく納得している」8人(11.5%)（男性4人、女性4人）、納得していない2人(2.6%)（女性2人）、無回答2人(0.3%)（女性2人）だった。避妊方法選択の合意について男女による回答の偏りは有意ではなかった ( $\chi^2(1) = 1.86$ ,  $p>0.1$ )。避妊方法選択についての年齢差は男女ともに有意ではなかった（男性  $F=0.23$ ,  $p>0.1$ 、女性  $F=1.05$ ,  $p>0.1$ ）。

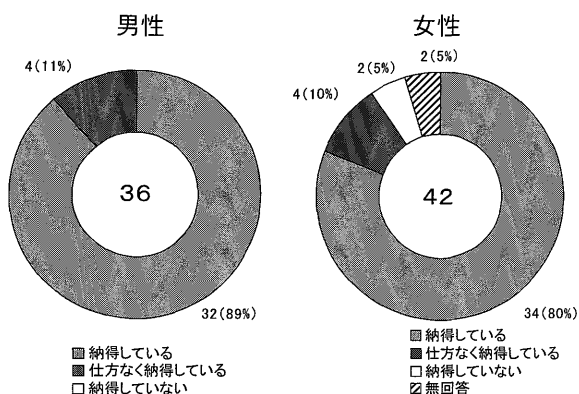


図2 避妊法選択の合意について

3) 避妊しなかった理由について

避妊しなかった理由として、「避妊しなかった」と回答した54人のうち、「避妊しなかった理由」は、「そ

の他」15人(27.8%)（男性10人、女性5人）、「妊娠しないと思った」14人(25.9%)（男性6人、女性8人）、「妊娠しなかった」12人(22.2%)（男性5人、女性7人）、「避妊具がなかった」3人(5.6%)（男性3人）、「面倒くさい」2人(3.7%)（男性1人、女性1人）、「時期を逃した」(女性1人)、「雰囲気や性感が損なわれる」(女性1人)「言い出せなかった」(女性1人)各1人(1.9%)だった。「妊娠しないと思った」14人の年齢は、20代1人、30代3人、40代4人、50代7人で、妊娠する可能性のある年代の者が半数を占めていた。

4) 避妊の決定に対する意思表示について

避妊決定の意思表示を図3に示す。「性的パートナーあり」と回答した134人のうち、避妊決定時の、意思表示をどの程度したかについて、「多くした」51人(38.0%)（男性20人、女性31人）、「少しした」24人(17.9%)（男性10人、女性14人）、「全くしなかった」44人(32.8%)（男性27人、女性17人）、無回答15人(11.3%)（男性6人、女性9人）だった。避妊の決定に対する意思表示について男女による回答の偏りは有意ではなかった ( $\chi^2(2) = 5.00$ ,  $p>0.05$ )。避妊の決定に対する意思表示について年齢差は男女ともに有意ではなかった（男性  $F=0.51$ ,  $p>0.1$ 、女性  $F=0.52$ ,  $p>0.1$ ）。

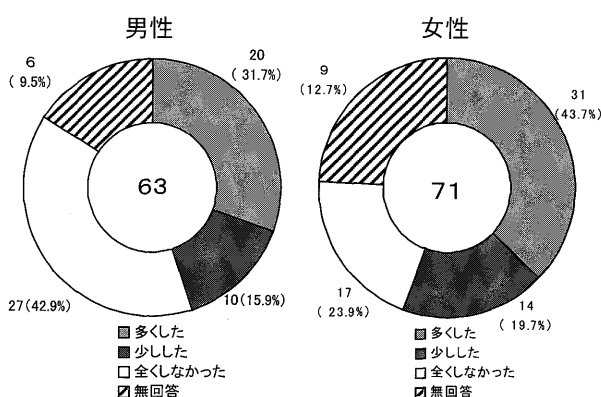


図3 避妊決定の意思表示について

5) 避妊の決定権について

避妊の決定権について図4に示す。「性的パートナーあり」と回答した134人のうち、「避妊するかしないかを最終的に決定したのは誰か」は、「二人で決めた」97人(72.4%)（男性48人、女性49人）、「自分だけで決めた」13人(9.7%)（男性6人、女性7人）、「相手が決めた」8人(6.0%)（男性2人、女性6人）、「その他」2人(1.5%)（男性1人、女性1人）、無回答14人(10.4%)

(男性6人、女性8人)だった。避妊の選択権について男女による回答の偏りは有意ではなかった ( $\chi^2(3) = 1.995, p > 0.1$ )。避妊の選択権について年齢差は男女ともに有意でなかった (男性  $F = 0.14, p > 0.1$ 、女性  $F = 2.23, p > 0.05$ )。

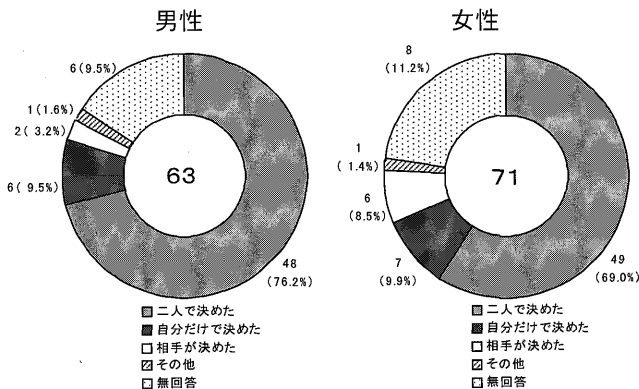


図4 避妊の決定権について

6) 避妊のイメージ

避妊のイメージについては、性的パートナーの有無と性差によって「パートナーあり (男性)」「パートナーなし (男性)」「パートナーあり (女性)」「パートナーなし (女性)」の4つの群に分けて検討することにした。

4群間で避妊のイメージを比較した。4群間で回答の偏りが有意だったのは「販売する側が避妊器具や避妊薬に対して偏見を持っている」 ( $\chi^2(1) = 21.16, p < 0.05$ ) 「家族の誰かと避妊について話することができる」 ( $\chi^2(1) = 25.70, p < 0.05$ ) 「避妊に関心がある」 ( $\chi^2(1) = 26.99, p < 0.01$ ) 「避妊器具や避妊薬は経済的負担が大きい」 ( $\chi^2(1) = 34.78, p < 0.01$ ) 「避妊器具や避妊薬の販売方法は閉鎖的である」 ( $\chi^2(1) = 21.38, p < 0.05$ ) だった。

8) 避妊のイメージの因子構造

避妊のイメージを構成している要素を探索しその因子構造を明らかにする目的で避妊のイメージについて因子分析を行った。探索的因子分析を行うにあたって主因子法による斜交回転プロマックス法を用いることにした。探索的因子分析の結果を表3に示す。探索的因子分析の結果、固有値が1.0以上であった5因子を抽出した。第1因子「避妊に関する情報提供への不満」、第2因子は「避妊に対する偏見」、第3因子は「避妊に関する知識・関心」、第4因子は「責任・尊厳の高まり」、第5因子は「性教育への期待」と名づけた。

避妊のイメージについては、男女間での比較とともに

性的パートナーの有無別に比較することにし、「性的パートナーあり (男性)」、「性的パートナーあり (女性)」、「性的パートナーなし (男性)」、「性的パートナーなし (女性)」の4群について比較検討した。

避妊のイメージを構成する5つの因子における4群間の因子得点の差は認められなかった (1因子  $F = 2.50, 0.05 < p < 0.1$ 、2因子  $F = 1.61, p > 0.1$ 、3因子  $F = 0.11, p > 0.1$ 、4因子  $F = 0.63, p > 0.1$ 、5因子  $F = 0.39, p > 0.1$ )。

表3 避妊のイメージの因子構造

	1因子	2因子	3因子	4因子	5因子
Q2	0.874	0.388	0.089	-0.041	0.072
Q1	0.719	0.411	0.230	0.044	0.078
Q6	0.620	0.505	0.360	0.071	0.194
Q5	0.545	0.493	0.355	0.070	0.000
Q20	0.461	0.192	-0.029	-0.052	0.199
Q15	0.364	0.876	0.329	0.055	0.180
Q3	0.638	0.810	0.256	0.045	0.088
Q4	0.459	0.658	0.184	0.176	0.064
Q14	0.210	0.555	0.506	0.349	0.162
Q11	0.185	0.334	0.846	0.248	0.124
Q12	0.134	0.314	0.722	0.354	0.138
Q7	0.388	0.488	0.492	0.137	0.181
Q16	0.140	0.130	0.466	0.210	0.285
Q10	-0.148	0.050	0.355	0.263	0.170
Q18	0.021	0.235	0.347	0.995	0.284
Q19	-0.053	0.104	0.334	0.793	0.317
Q17	0.063	0.000	0.303	0.395	0.179
Q9	0.219	0.207	0.192	0.330	0.915
Q8	0.123	0.130	0.228	0.273	0.834
Q13	0.033	0.168	0.277	0.184	0.399
固有値	5.208	2.986	1.764	1.316	1.252
分散%	26.040	14.931	8.822	6.582	6.258
累積%	26.040	40.971	49.793	56.375	62.633

因子抽出法: 最尤法・回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

IV. 考 察

今回は、避妊行動の背景にある避妊に対する意識とイメージを明らかにし、男女で避妊に対する意識やイメージがどのように偏っているかを成人期世代の男女で比較検討することを目的とした。対象は既婚者が多く、性行為を行っている可能性の高い年代であるため、「性的パートナー有」が8割とその多くを占めていた。対象者の平均年齢は、38.9歳であり、約7割が生産年齢期にあったが、妊娠したかった12人を除くと「性的パートナー有」のうち約半数が避妊を実施していた。

(1) 避妊の実行について

「避妊しなかった」と答えた者のうち、8割近くの者は、妊娠を望んでいないにも関わらず、避妊していなかった。「妊娠しないと思った」と答えた者のうち、生産年齢期にある者は、約半数であったことから、避妊に対する知識が成熟期世代においても十分浸透して

いない結果とみなすことができる。

北村らは、性行動が自由で活発になっているように見える現代においても、女性は本当の意味で解放されておらず、男女が対等に関わり合っていない<sup>3)</sup>という。今回、少数ながらも、避妊を「言い出せない」ために避妊できなかったのはいずれも女性であった。

避妊したと回答した者のうち、避妊方法として「コンドーム (男性用)」を用いている者が7割と男女共に多かった。林ら<sup>1)</sup>の本邦における避妊法調査で「コンドーム (男性用)」を用いている者が7割との報告と合致した結果だった。前述の報告は、低用量経口避妊薬認可前の結果であるが、本邦で用いられている避妊方法は以前と変わりなく、「コンドーム (男性用)」が最も多いことが分かった。次いで多かったのが、「性交中絶法 (膈外射精)」だった。「性交中絶法 (膈外射精)」は射精前のクーパー腺液中に精子が含まれるため妊娠の可能性が高く、避妊法とはいえないことが専門的には知られているが、「コンドーム (男性用)」に次いで多かったことから、この結果からも、避妊の知識が成熟期世代において十分に浸透していないことが示唆された。

「低用量経口避妊薬」、「IUD」、「コンドーム (女性用)」の使用者はいなかった。林ら<sup>1)</sup>、北村ら<sup>3)</sup>の調査によると、本邦では、低用量経口避妊薬は女性の約1割が使用しているという結果が得られているが、今回の調査では「低用量経口避妊薬」の使用者はいなかった。「低用量経口避妊薬」は、産婦人科での医師の診察や検査が必要であること、喫煙者や婦人科疾患をもっている者などに使用の制限があること、定期的な検査が必要であること、費用がかかること、副作用が懸念されること<sup>5)</sup>が普及を妨げている一因として挙げられる。「低用量経口避妊薬」と同様に入手及び装着ともに医療機関を受診する必要がある「IUD」や、男性器と女性器の構造上の違いから装着が簡易ではない「コンドーム (女性用)」は、女性主体の避妊方法ではあるが、選択されていないことがわかった。米国における報告<sup>6)</sup>では、コンドーム (女性用) は、男性側にとっては性感を損なうことなく使用でき、女性側にとっては自分の意思で使用することができることからSTD予防の意味だけでなく様々な用途での使用が期待できるとし、今後推奨していくにあたり学習プログラムを組むことが必要とされている。本邦においてもコンドーム (女性用) の有用性については学習を深め、普及にむけた活動が必要と考えた。

避妊方法選択は、8割以上の者が納得していた。

「仕方なく納得している」と答えた者が約1割おり、避妊方法として、「コンドーム (男性用)」・「性交中絶法」が用いられていた。「納得していない」と答えた者はいずれも女性であり、避妊方法としても、「コンドーム (男性用)」・「性交中絶法」が用いられていた。少数ではあるが、避妊方法に納得していない女性はすべて男性主体の避妊法を強要されていた。

避妊の意思表示については、女性が男性に比べて多く意思表示していることが分かった。野田<sup>4)</sup>は、女性側に妊娠するかどうかを自分で選択する意識を育てる必要があると述べているが、避妊の最終的な決定について、「ふたりで決めた」が約6割であり、2人の合意のもとであることがわかった。対象者に既婚者が多かったことも結果に影響を与えたと考えた。

「相手が決めた」と回答した者のうち、8割が女性だったことは、男性に決定権を委ねたのは、男性主体である「コンドーム (男性用)」を使っていたことが一因であると考えた。避妊方法に納得してないと回答したものはすべて女性だったこととあわせて考えると、女性主体の簡便な避妊方法の選択肢が拡大することが望まれる。

## (2) 避妊のイメージについて

「パートナーあり (女性)」は、避妊の際の経済的負担感や、販売する側に避妊具への偏見、販売方法の閉鎖性を感じていた。家計をあずかるものが避妊具を購入しているとも考えられ、主婦が購入する場合、偏見ある態度をとられたり避妊具が購入しにくい現状であることは、今後改善される必要があると考えた。

女性が避妊についての意思表示を多くしていたことが明らかになったが、「パートナーあり (女性)」で避妊についてオープンに話せていたが、「パートナーあり (男性)」で避妊に関心のあるものが少なかった。女性が避妊に対して関心も高く、避妊決定の意思表示を男性より多くしていながら、男性主体の避妊法を選択せざるをえない状況にあることについて、成人期世代においては、避妊法選択肢の拡大が望まれること、女性の性に関する健康を守るための情報の伝達方法を見直し、十分な情報が避妊を必要としている世代に浸透させることの必要性を感じた。

避妊のイメージは5因子構造をなしていたが、第1因子は「避妊に関する情報提供への不満」、第2因子は「避妊に対する偏見」、第3因子は「避妊に関する知識・関心」、第4因子は「責任・尊厳の高まり」、第5因子は「性教育への期待」だった。避妊のイメージを構成する各因子について4群間で比較した結果、有

意差は認められなかったことから、避妊のイメージ構成要因は性差及びパートナーの有無では差がないことが明らかになった。避妊のイメージの中に「性教育の期待」因子が存在した。英国における報告<sup>8)</sup>によると、思春期における若者に対して避妊教育を実施した群と教育をしなかった群と比較すると避妊に対する知識が増していたが、性活動やリスクの高い性行動に関して、差違がなかった。本邦においては、性教育を実施する教員の避妊教育を評価した報告はない。現在学齢期に実施されている避妊に関する性教育について評価する時期にきており、避妊を含めた学齢期における性教育の見直しを含め検討する必要があるのではないかと考えた。

成人期世代の避妊のイメージや意識は、男女において特徴的ではなかった。女性は、避妊について意思表示できていたが、適切な性行動がとれていないことから、知識や正しい情報の伝達が学齢期だけでなく、成人期世代の男女においても必要であると考えた。本邦における避妊方法は選択肢が少ないため、避妊について意思表示できない女性たちは納得のいかない避妊を強要されている現状が明らかになった。低用量経口避妊薬やコンドーム（女性用）が普及しないことも考慮し、避妊を「言い出せない」女性が、簡便で主体的に実施できる避妊方法の拡大が必要であると考えた。

## V. まとめ

- 1、「性的パートナー有」と回答したもので、避妊したものは約半数だった。避妊方法は「コンドーム法（男性）」が7割と最も多く、「コンドーム（女性用）」、「低用量ピル」、「IUD」、「リズム法」はいなかった。
- 2、避妊方法選択における性別および年齢による差はみられなかった。
- 3、避妊方法選択の合意については、8割が「納得している」と回答していた。性別および年齢による差はみられなかった。
- 4、「避妊しなかった」と答えた者のうち、8割近くの者は、妊娠を望んでいないにも関わらず、避妊していなかった。成熟期世代の避妊に対する知識が十分に浸透していない可能性が示唆された。
- 5、「パートナーあり（女性）」は、避妊に対してパートナーと話せており、避妊具も自ら購入していた。一方、「パートナーあり（男性）」は避妊に無関心な様子が明らかになったことから、女性主体で用いることのできる避妊法選択肢が拡大されることが望まれる。

6、避妊のイメージは第1因子「避妊に関する情報提供への不満」、第2因子は「避妊に対する偏見」、第3因子は「避妊に関する知識・関心」、第4因子は「責任・尊厳の高まり」、第5因子は「性教育への期待」だった。避妊のイメージ構成要因は、性差及びパートナーの有無では有意差がないことが明らかになった。

## 文 献

- 1) 林 謙治ほか：男性の人工妊娠中絶及び避妊に関する意識について、51-61、平成8年厚生省心身障害研究
- 2) 厚生統計協会編：2001年国民衛生の動向、57、2002
- 3) 北村 邦夫ほか：若い女性の月経・健康・避妊に関する意識と実態に関する研究、187-228、平成8年厚生省心身障害研究
- 4) 野田順子：妊娠中及び出産後の女性を対象とした望まない妊娠に関する調査、231-243、平成8年厚生省心身障害研究
- 5) Marchbanks PA, McDonald JA etc :Oral Contraceptives and the Risk of Breast Cancer, New England Journal of Medicine, 346 (26), 2025-2032, 2002
- 6) Gilbert LK :The FEMALE CONDOM (FC) in the US: lessons learned, American Journal of Public Health, 89 (6), 1-28, 1999
- 7) 金田弓子ほか：大学生の避妊に対する意識と行動、母性衛生、38 (1)、18-24、1997
- 8) Wight Daniel , Raab, GM etc :Limits of teacher delivered sex education: interim behavioural outcomes from randomised trial, British Medical Journal , 324 (7351), 1430-1435, 2002

---

*Title*: The comparison of the images of the contraception in adult male and female

*Author*: Kumiko Kido\*, Takashi Hayashi\*, Mizuho Sanada\*, Naomi Yamamoto\*, Mariko Kitagawa\*\*, Kazumi Uchiyama\*\*\*

\*Yamaguchi Prefectural University School of Nursing

\*\*Nagoya City University School of Nursing

\*\*\*Siebold University of Nagasaki Faculty of Nursing and Nutrition

*Abstract*:

In this study, we disclose the ideas and images of the contraception in choosing contraception, and we investigate the difference of the images between male and female. Subjects were 376 adult male and female living in Yamaguchi prefecture. The study was performed with a questionnaire consisting of twenty items about the images of contraception. We took 156 replies to our questionnaire. Most popular procedure of the contraception was a condom for male. Seventy percent of the subjects chose these methods. Eighty percent of the subjects chose the method of contraception by agreement in the couple. There was no difference in the method and choice of contraception between male and female. Eighty percent of subjects without contraception could not get pregnant. The images of contraception consisted of five factors. These factors had no statistical differences between the sex and the presence of the partner. There was no sexual difference of the images for the contraception in the matured generations. They contributed actually in decision of contraception. But there was sufficient knowledge for the contraception.

*Key words*: contraception, ideas and images, adult

---